

# 利用者のために

## 1 調査の概要

### (1) 調査の目的

農業経営統計調査（以下「調査」という。）は、農家の経営及び農産物の生産費の実態を明らかにし、農業行政の基礎資料を整備することを目的としている。

### (2) 根拠法規

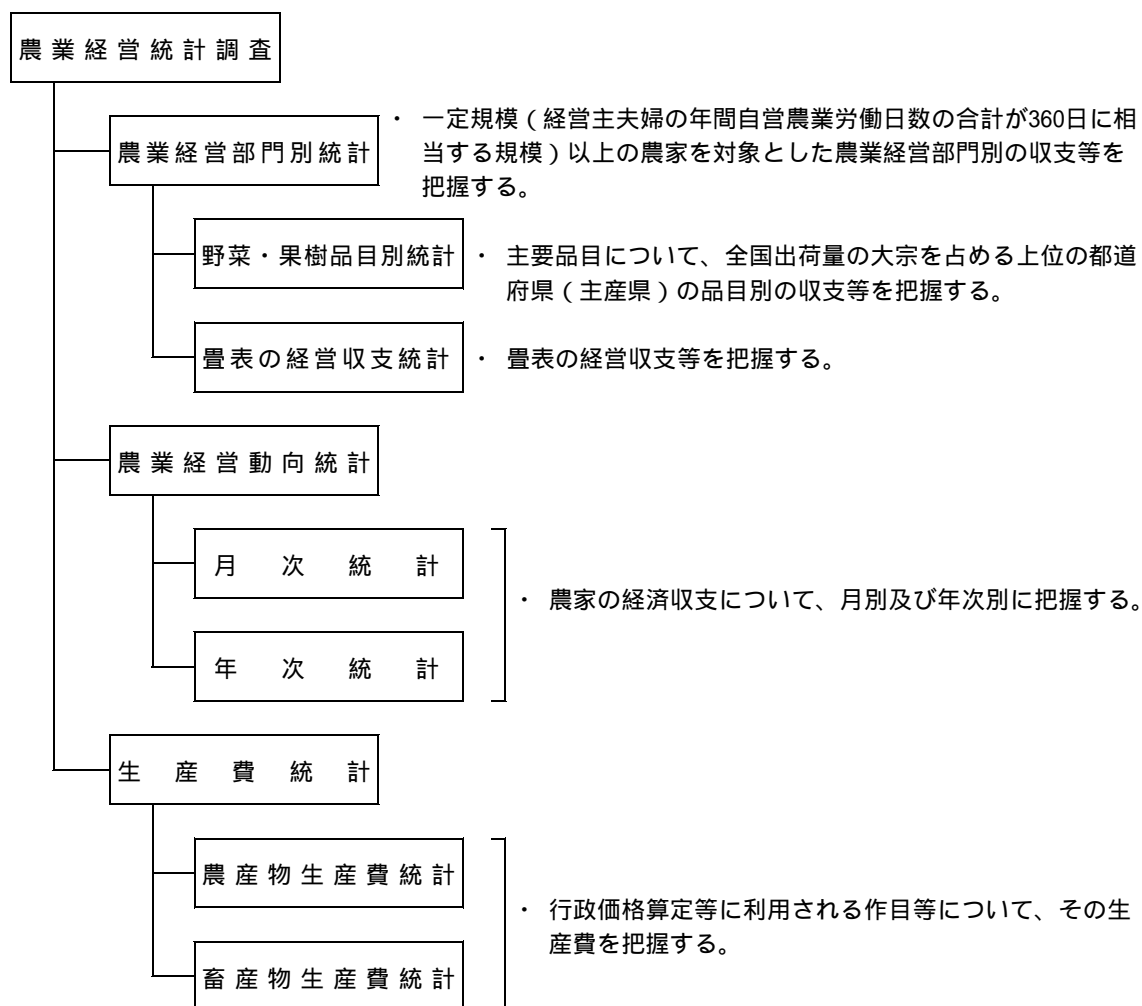
調査は、統計法（昭和22年法律第18号）統計法施行令（昭和24年政令第130号）及び農業経営統計調査規則（平成6年農林水産省令第42号）に基づき実施した。

### (3) 調査の機構

調査は、農林水産省大臣官房統計部及び地方統計組織を通じて実施した。

### (4) 調査により作成する統計の体系

調査により作成する統計の体系については、次のとおりである。



(5) 農業経営部門別統計のねらいと特徴

農業経営部門別統計（以下「部門別統計」という。）は、我が国農業の「担い手層及びこれに準ずる層」と考えることができる一定規模以上の農家を対象に、農業経営収支等を農業経営全体と「稲作」、「酪農」等の経営部門別に把握し、部門別の収益性、生産性の相違や複合経営における部門の組合せによる経営の差異など、部門別に農業経営の実態を明らかにすることを目的としている。

部門別統計の特徴点をあげると次のとおりである。

大規模経営の経営実態を把握

部門別統計は、各部門とも大規模階層から多く標本を確保しており、これまでの統計（「農家経済調査」）よりも規模階層の大きい農家の経営内容の把握が可能となっている。

例えば、本書においては、稲作部門は作付面積15.0ha以上階層、酪農部門は搾乳牛飼養頭数100頭以上階層まで表示した。

様々な経営のタイプに即して経営実態を把握

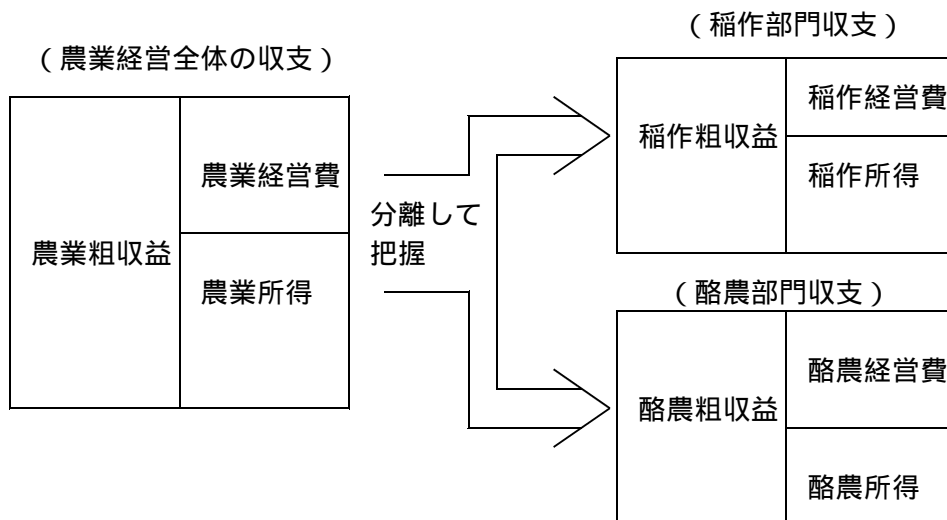
部門別統計は、クロスセクション（横断面比較）に主眼をおいた統計であり、地域別・経営タイプ別に経営内容を把握することが可能となっている。

例えば、地域範囲は稲作部門では主産県別結果まで収録したほか、複合経営については具体的な部門の組合せ別に表示した。

部門収支の把握により複合経営の経営実態が明確に

これまでの統計（「農家経済調査」）では農業経営全体の収支等しか把握していなかったため、例えば、複合経営農家の場合、主部門と従部門のどちらの収益性、生産性が高いのか、あるいは経営において労働時間や資本がどのように配分されたか等が不明確であった。部門別統計では、主部門、従部門別の経営収支等を把握していることから、複合経営における部門間の相互関係などを明確に把握することが可能となっている。

稲作 + 酪農複合経営の農業経営収支の把握の仕方



( 6 ) 調査対象の考え方

部門別統計においては、我が国の農業経営の主体を成す家族経営の典型的な姿を、経営主夫婦二人により営まれる農業経営と規定した。その上で、経営主夫婦二人が専ら農業に従事する農家の年間<sup>(注)</sup>自営農業労働日数の合計が平均360日となっていることから、この自営農業労働日数に相当する規模をもって、部門別統計の対象農家における農業経営の規模基準とした。

注： 経営主夫婦二人の年間自営農業労働日数360日の算出根拠については、「農業経営動向統計」において、夫婦ともに年間自営農業労働日数が60日以上となっている農家の年間自営農業労働日数の合計が平均360日であることに基づいた。

( 7 ) 調査対象

調査対象は、販売農家（経営耕地面積30a以上又は農産物販売金額50万円以上）のうちの一定規模（経営主夫婦の年間自営農業労働日数の合計が360日に相当する規模）以上の農家（担い手及びこれに準ずる層）であり、具体的には、経営部門ごとに以下に示す規定とともに該当する農家とする。

ア 経営耕地面積が2.0ha以上（北海道5.0ha以上）の農家又は、これ以外の農家でも、農産物販売金額において1位の経営部門（以下、「1位部門」、次いで2位の経営部門を「2位部門」という。）の作付・飼養規模が次表の基準を満たしている農家。

イ 対象となる経営部門が1位部門又は2位部門のいずれかに該当し、かつ、該当部門の販売金額が農産物販売金額全体の2割以上を占める農家。

経営部門ごとの下限基準

経営部門	下限基準	
	都府県	北海道
稲 作（作付面積）	150 a 以上	500 a 以上
麦 類（ " ）	200 a 以上	500 a 以上
豆 類（ " ）	"	"
いも類（ " ）	"	"
露地野菜（ " ）	100 a 以上	200 a 以上
施設野菜（ " ）	2,000m <sup>2</sup> 以上	同 左
果 樹（植栽面積）	100 a 以上	同 左
露地花き（作付面積）	"	同 左
施設花き（ " ）	2,000m <sup>2</sup> 以上	同 左
工芸農作物（ " ）	100 a 以上	500 a 以上
酪 農（搾乳牛頭数）	10頭以上	同 左
肥育牛（飼養頭数）	20頭以上	同 左
養 豚（ " ）	500頭以上	同 左
採卵養鶏（飼養羽数）	3,000羽以上	同 左
ブロイラー養鶏（出荷羽数）	30,000羽以上	同 左

(8) 調査農家の選定

調査農家の選定は、下記により行った。

ア 調査農家選定リストの作成

2000年農林業センサス結果における販売農家について、都道府県ごとに農産物販売金額1位の作目によって稲作、麦類、露地野菜、施設野菜、果樹、花き、工芸農作物、酪農、肉用牛、養豚、採卵養鶏、ブロイラー養鶏およびその他の13部門に区分し、このうち(7)に該当する農家の1位部門について作付・飼養規模を階層別にさらに区分し、各階層で規模の大きいものから順に配列したリストを作成した。

イ 標本数

単位：戸

稲作	989	果樹	390	肉用牛	296
麦類	58	花き	181	養豚	201
露地野菜	363	工芸農作物	211	採卵養鶏	48
施設野菜	344	酪農	639	ブロイラー養鶏	31
				その他	159

部門の作付・飼養規模階層区分

区 分	規 模 階 層 区 分											
	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~2.5	2.5~3.0	3.0~4.0	4.0~5.0	5.0~7.0	7.0~10.0	10.0~15.0	15.0ha以上
稲作部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~2.5	2.5~3.0	3.0~4.0	4.0~5.0	5.0~7.0	7.0~10.0	10.0~15.0	15.0ha以上
麦類部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0~7.0	7.0ha以上					
露地野菜部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0ha以上					
施設野菜部門	0.2ha未満	0.2~0.3	0.3~0.5	0.5~0.7	0.7~1.0	1.0ha以上						
果樹部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~3.0	3.0ha以上						
花き部門	0.2ha未満	0.2~0.3	0.3~0.5	0.5~0.7	0.7~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~3.0	3.0ha以上			
工芸農作物部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0ha以上						
酪農部門	10頭未満	10~20	20~30	30~50	50~80	80~100	100頭以上					
肉用牛部門	5頭未満	5~10	10~20	20~30	30~50	50~100	100~200	200頭以上				
養豚部門	100頭未満	100~300	300~500	500~1000	1000~2000	2000頭以上						
採卵養鶏部門	3千羽未満	3千~1万	1万羽以上									
ブロイラー養鶏部門	3万羽未満	3万~10万	10万羽以上									
その他部門	0.5ha未満	0.5~1.0	1.0~2.0	2.0~3.0	3.0~5.0	5.0~10.0	10.0~20.0	20.0ha以上				

注：「その他部門」については、上記部門に区分されない経営部門を経営耕地面積によって区分している。

## ウ 調査農家の抽出

### (ア) 農家抽出階層の編成

アで作成したリストを1位部門、作付・飼養規模別標本数で等分し、農家抽出階層を編成した。

### (イ) 調査農家の抽出

農家抽出階層から1戸ずつ農家を無作為抽出して調査農家とした。

なお、抽出した農家が調査困難な場合は、同一の抽出階層から農家を再抽出した。

## (9) 調査期間

平成15年の調査期間は、平成15年1月から12月までの1年間である。

## (10) 調査項目

調査農家においては、農業経営の実態を把握するために必要な事項について調査した。その主な事項は次のとおりである。

ア 世帯員数	イ 自営農業労働時間	ウ 経営土地
エ 農産物の作付(飼養)規模・生産量	オ 農業固定資本額	
カ 農業粗収益	キ 農業経営費	ク 借入金・買掛未払金(農業負担分)

なお、部門別統計は農業経営部分に限定して取りまとめを行ったため、農家の農外収支、家計費等については把握していない。

## (11) 調査方法

調査農家について、調査票(日計簿)を配付して記帳を依頼する記帳調査の方法と統計・情報センターの職員による面接調査とによって行うもので、1年間の継続記帳を基礎とする簿記(単式簿記)調査である。

すなわち、農家に日々の現金収支、現物の受払い及び消費、労働時間などの記帳を依頼するとともに、統計・情報センターの職員が農家に面接して世帯員及びその異動、農家財産の増減・変化などを聞き取り、それらの資料を基に簿記的操作によって決算を行い、農家ごとの結果を取りまとめた。

## 2 調査結果の取りまとめ方法と統計表の編成

### (1) 調査結果の取りまとめ方法

#### ア 取りまとめ対象農家

調査農家のうち、平成15年1月1日から12月31日までの1年間について記帳取りまとめを行った調査対象農家である。したがって、同期間中に離農した調査農家や記帳不能等により調査を中止した調査農家は除いた。

#### イ 取りまとめ方法

調査の取りまとめは、取りまとめ対象農家について農家ごとの結果を農家別年計表（参考3に様式を示した）にまとめ、その項目別にそれぞれ農家1戸当たりの平均値を各経営部門別に算出しこれを表示した。

なお、取りまとめ対象とした部門は、農家ごとに調査期間中の実績が1の（7）のアに示す経営部門に該当する部門とした。

ウ 平均値の推定方法

$$\text{求めようとする項目の平均値} = \frac{\sum_{i=1}^n W_i \times x_i}{\sum_{i=1}^n W_i}$$

n : 集計戸数

W<sub>i</sub> : i番目の取りまとめ対象農家のウェイト

x<sub>i</sub> : i番目の取りまとめ対象農家の求めようとする項目の数値（調査結果）

注： ウェイトは農家リストの北海道・都府県別、部門・規模階層別における抽出率の逆数とし、標本農家別に定めた。

（参考）集計戸数

単位：戸

稲作	940	果樹	370	肉用牛	214
麦類	62	花き	161	養豚	172
露地野菜	353	工芸農作物	236	採卵養鶏	45
施設野菜	336	酪農	629	ブロイラー養鶏	29
				その他	82

（2）統計表の表側区分の編成

統計表は、各経営部門別にそれぞれ次の表側区分により編成した。

ア 「部門経営」

当該部門を1位（農産物販売金額が最も多い部門）又は2位部門として経営するすべての取りまとめ対象農家について表示したものである。

イ 「部門1位の経営」

当該部門が1位であるすべての取りまとめ対象農家について表示したものである。

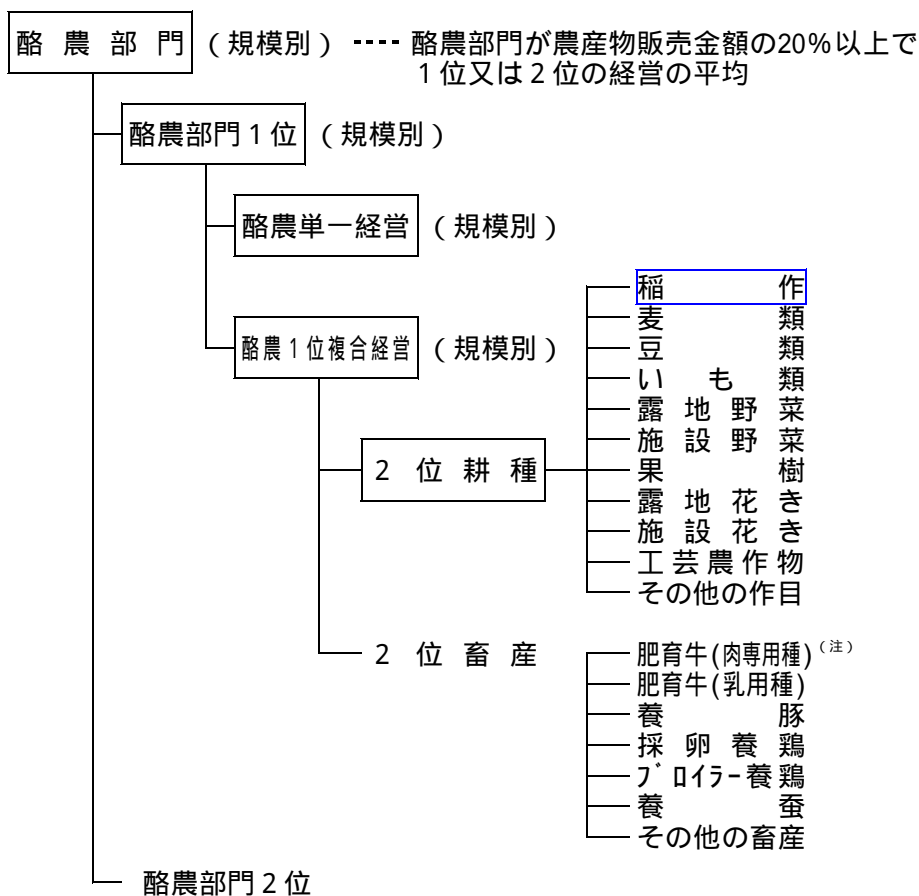
ウ 「単一経営」

当該部門が1位である取りまとめ対象農家のうち、当該部門の農業現金収入が農業現金収入合計（農作業受託収入を除く。）の80%以上を占める経営について表示したものである。

エ 「1位複合経営」

当該部門が1位である取りまとめ対象農家のうち、当該部門の農業現金収入が農業現金収入合計（農作業受託収入を除く。）の80%未満の経営について表示したものであり、2位部門との組み合わせ別にも可能な限り表示した。

部門別統計の取りまとめ内容（酪農部門の例）



稲作については、統計表に表示した。

注：「肉専用種」とは、黒毛和種、褐毛和種等の和牛、ヘレフォード、アバディーンアンガス等の外国牛の肉専用種を含み、乳用種以外の肉用牛をいい、「乳用種」とは、肉用を目的に肥育しているホルスタイン等の乳用種及びその交雑種の牛をいう。

肥育牛部門では、年間月平均肥育牛飼養頭数のうち肉専用種が5割を超える場合は、肥育牛(肉専用種)部門とし、5割に満たない場合は、肥育牛(乳用種)部門とした。

各表側区分においては農業経営全体に係る経営収支等と当該部門に係る経営収支等をそれぞれ上段、下段に表示した。

また、部門別統計は一定規模以上の農家を対象に作成しているが、調査対象を1の(7)のように規定していることから、経営耕地面積の規定では該当するものの部門ごとの作付・飼養規模が下限基準に満たない農家も含まれることとなる。このため、各表側区分においては、それらの農家を含んだ平均値を「平均」として表示したほか、当該部門の下限基準以上層の平均値についても併せて表示した。

さらに、酪農部門については年間月平均搾乳牛飼養頭数、肥育牛部門については年間月平均肥育牛飼養頭数、養豚部門については年間月平均肥育豚飼養頭数、採卵養鶏部門については年間月平均採卵養鶏飼養羽数、フロイラー養鶏部門についてはフロイラー販売羽数により規模階層区分別に表示した。

統計表の表側区分の見方（酪農部門経営の例）

区 分		
全 国 酪農部門経営 農業経営全体	平 均	1
	10 頭 以 上	2
	10 ~ 20頭未満	3
	20 ~ 30	4
	・	
	・	
	・	
	・	
	・	
	・	
酪 農 部 門	平 均	18
	10 頭 以 上	19
	10 ~ 20頭未満	20
	20 ~ 30	21
	・	
	・	

酪農部門が農産物販売金額の20%以上で、1位又は2位を占める経営（月平均搾乳牛飼養頭数が10頭未満の経営を含む。）の平均である。

酪農部門が農産物販売金額の20%以上で、1位又は2位を占める経営のうち、月平均搾乳牛飼養頭数が10頭以上の経営の平均である。

農業経営全体に係る経営収支等を表示した。

農業経営全体のうち酪農部門に係る経営収支等を表示した。すなわち、表側18番は表側1番の内数を示しているという関係になる。

(3) 全国農業地域区分

統計表に用いた全国農業地域区分は次のとおりである。

全国農業地域名	所属都道府県名
北海道	北海道
東北	青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
北陸	新潟、富山、石川、福井
関東・東山	茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、長野
北関東	茨城、栃木、群馬
南関東	埼玉、千葉、東京、神奈川
東山	山梨、長野
東海	岐阜、静岡、愛知、三重
近畿	滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
中国	鳥取、島根、岡山、広島、山口
山陰	鳥取、島根
山陽	岡山、広島、山口
四国	徳島、香川、愛媛、高知
九州	福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島
北九州	福岡、佐賀、長崎、熊本、大分
南九州	宮崎、鹿児島



### 3 統計項目の説明

#### (1) 農業経営収支の総括

農業経営収支の総括を、農業経営全体及び当該部門について表示した。

$$\text{農業所得} = \text{農業粗収益} - \text{農業経営費}$$

#### (2) 分析指標

農業経営の主要な分析指標を次の算式により計算し、農業経営全体及び当該部門について表示した。

$$\text{ア 農業所得率}(\%) = \frac{\text{農業所得}}{\text{農業粗収益}} \times 100$$

##### 【指標の意味】

農業粗収益のうち、どれだけが農業所得として実現するかを示す指標。

$$\text{イ 農業純生産} = \text{農業粗収益} - (\text{農業流動財費} + \text{農業固定財費})$$

##### 【指標の意味】

農業粗収益から物財費（雇用労賃、支払小作料及び農業経営に係る負債利子を含まない農業経営費）を差し引いたもので、農業生産による付加価値額を示す指標。

注：1 農業流動財費 = 農業経営費 - (減価償却費 + 雇用労賃 + 支払小作料 + 農業経営に係る負債利子)

2 農業固定財費 = 減価償却費

$$\text{ウ 付加価値率}(\%) = \frac{\text{農業純生産}}{\text{農業粗収益}} \times 100$$

##### 【指標の意味】

農業粗収益のうち、どれだけが農業生産によって新たに付加価値額として生み出されたものであるかを示す指標。

$$\text{エ 農業固定資本装備率}(\text{円}) = \frac{\text{農業固定資本額}}{\text{自営農業労働時間}}$$

##### 【指標の意味】

固定資本装備の大きさを示す指標。一般的には労働者1人当たりの固定資本額をいうが、農業の場合は、農業労働に季節性があること等から自営農業労働1時間当たりの固定資本額を示した。

注：自営農業労働時間は、自家農業労働時間と農作業受託に係わる労働時間を合わせたものである。

$$\text{オ 農機具資本比率}(\%) = \frac{\text{大農具・自動車の資本額}}{\text{農業固定資本額}} \times 100$$

##### 【指標の意味】

農業固定資本額のうち、農機具や農用自動車などの機械装備に係わる資本額の割合を示す指標。

$$\text{カ 農業固定資本回転率(回)} = \frac{\text{農業粗収益}}{\text{農業固定資本額}}$$

【指標の意味】

農業固定資本の運用効率、利用度の状況を見る指標。

キ 集約度指標

(ア) 経営耕地面積10 a 当たり自営農業労働時間(時間)

$$= \frac{\text{自営農業労働時間}}{\text{経営耕地面積}} \times 10$$

【指標の意味】

経営耕地の単位面積当たりでどれだけ労働時間が投下されたか、すなわち労働の集約度を見る指標。

(イ) 経営耕地面積10 a 当たり農業固定資本額(1,000円)

$$= \frac{\text{農業固定資本額}}{\text{経営耕地面積}} \times 10$$

【指標の意味】

経営耕地の単位面積当たりでどれだけ固定資本が投下されたか、すなわち資本の集約度を見る指標。

ク 収益性指標

(ア) 家族農業労働1時間当たり農業所得(円)

$$= \frac{\text{農業所得}}{\text{家族農業労働時間}}$$

【指標の意味】

投下された労働の単位時間当たりの所得でみた労働収益性を示す指標。この指標により異なる部門間や同一部門での規模間比較が可能。

注： 家族農業労働時間は、自営農業労働時間から雇用者の農業労働時間を除いたものである。

(イ) 農業固定資本1,000円当たり農業所得(円)

$$= \frac{\text{農業所得}}{\text{農業固定資本額}} \times 1,000$$

【指標の意味】

投下された固定資本の単位金額当たりの所得でみた資本収益性を示す指標。「家族農業労働1時間当たり農業所得」と同様に異なる部門間や同一部門での規模間比較が可能。

(ウ) 経営耕地面積10 a 当たり農業所得(円)

$$= \frac{\text{農業所得}}{\text{経営耕地面積}} \times 10$$

【指標の意味】

経営耕地の単位面積当たりでどれだけ所得が得られたかを見る指標。経営耕地の利用度と

も関係して稲作などの土地利用型部門では有用な指標。

#### ケ 生産性指標

$$(ア) \text{ 農業労働 1 時間あたり農業純生産 (円)} = \frac{\text{農業純生産}}{\text{自営農業労働時間}}$$

##### 【指標の意味】

投下された労働の単位時間当たりの純生産でみた労働生産性を示す指標。この指標により異なる部門間や同一部門での規模間比較が可能。

(イ) 農業固定資本1,000円あたり農業純生産(円)

$$= \frac{\text{農業純生産}}{\text{農業固定資本額}} \times 1,000$$

##### 【指標の意味】

投下された固定資本の単位金額当たりの純生産でみた資本生産性を示す指標。「農業労働1時間あたり農業純生産」と同様に異なる部門間や同一部門での規模間比較が可能。

(ウ) 経営耕地面積10 a 当たり農業純生産(円)

$$= \frac{\text{農業純生産}}{\text{経営耕地面積}} \times 10$$

##### 【指標の意味】

経営耕地の単位面積当たりでどれだけ農業生産による付加価値(純生産)が得られたかをみる指標。経営耕地の利用度とも関係して稲作などの土地利用型部門では有用な指標。

### (3) 世帯員及び農業就業者

#### ア 月平均世帯員数

月に15日以上その家に在住し、生計を共にした家族及び同居人の月別世帯員数を累積し、12か月で除した年間月平均世帯員数である。

#### イ 家族農業就業者

年内に自営農業労働(ゆい・手伝い・手間替出・共同作業出を含む。)に60日以上従事した家族(同居人は除く。)である。

##### (ア) 農業専従者

自営農業労働日数が150日以上のものであり、男女別にその人数を表示するとともに、その内数として「35歳未満」、「65歳以上」及び「250日以上」の人数をそれぞれ表示した。

##### (イ) 準専従者

自営農業労働日数が60日以上150日未満のものであり、男女別にその人数を表示した。

#### (4) 経営耕地面積等

##### ア 経営耕地面積

農業経営に使用する目的で準備された耕作用の土地面積である。

この面積は、原則として年始め現在について表示したが、年内に購入、借入れ又は売却、貸付けなどのため異動があった場合には、その土地がその年の主要農業生産に利用されたかどうかにより経営耕地面積としての計上の可否を判定し、年始めの面積を修正した。

なお、従来、簡単な牧柵等により家畜を数か月又は1か年程度放牧・けい牧し、その後は牧草地又は普通畑として利用するものは経営耕地に含めていたが、平成8年からこの場合は放牧地（耕地以外の土地）として取り扱うこととした。

##### イ 経営耕地面積のうち、借入地

経営耕地面積のうち、借入地を表示した。

##### ウ 作物の作付延べ面積

土地利用の状況をみるため、作物の作付延べ面積を表示した。

#### (5) 農家の財産（固定資産及び流動資産年末残高）

農家の世帯としての財産のうち、固定資産及び流動資産について資産の種類別に期末の残高を表示した。

##### ア 固定資産

年始め現在価から、増資（購入、成長等）となったものを足し、減資（減価償却、売却等）となったものを差し引いて年末残高を算出した。

なお、固定資産として取り扱う建物、大農具・自動車については、取得価額10万円以上のものとした。

ただし、農外事業専用の建物、大農具・自動車で100万円未満のもの及び自動車を除く家計専用の家財・家具は固定資産として計上していない。

##### イ 流動資産

未処分農産物は、その農産物の生産原価により評価すべきであるが、この調査では原価計算が困難なため、その農産物を収穫した年の生産最盛期の価格（農家庭先販売価格）により評価した。

なお、このようにして未処分農産物を評価することにより発生する年内差損益については、次年に販売（処分）した時点で評価することとした。

農業生産資材の評価は、平均単価法によることとし、平均単価は購入付帯費を加算した購入価額を購入数量で除して計算した。



( 6 ) 固定資産の購入等

年内に農家が購入した固定資産の購入額を、土地、建物、大農具・自動車の資産別に表示した。  
また、各資産とも内訳として農業用の購入額を表示した。

なお、この購入額には土地の開墾・開田、土地改良、建物・大農具の大修繕による増加額を含めた。

( 7 ) 自営農業労働時間

自営農業に対する労働投下量を、家族（ゆい・手間替受含む）・雇用別に、農業経営全体と当該部門について表示した。この労働時間には、農業生産の準備から農産物の販売に至るまでの一切の農業労働時間を含めているほか、農作業受託労働時間、農業経営のための集会出席、技術習得などの企画管理労働時間も含めた。

( 8 ) 農業固定資本額

農業固定資本額を、建物、大農具・自動車、植物及び動物の各資産別に、農業経営全体及び当該部門について表示した。

ア 建物、大農具・自動車

年始めに所有する資産の年始め現在価に農業使用割合を乗じて算出した額と、年内に新築又は購入等により増加した資産であって年内に使用を開始した資産の購入価額に農業使用割合を乗じて算出した額との合計である。使用割合については、農業、農外事業（兼業）及び家計の別にそれぞれの利用面積及び利用日数により決めた。

イ 植物、動物

年始め現在価をそのまま表示した。

( 9 ) 作付・飼養規模、生産量

水稻及び当該部門の作付・飼養規模及び生産量を表示した。

ア 作付・飼養規模

水稻については作付延べ面積であり、当該部門については、酪農部門は年間月平均搾乳牛飼養頭数、肥育牛部門は年間月平均肥育牛飼養頭数、養豚部門は年間月平均肥育豚飼養頭数、採卵養鶏部門は年間月平均採卵鶏飼養羽数である。

イ 生産量

水稻の生産量は玄米（もみは玄米に換算）の生産量であり、当該部門については、酪農部門は生乳生産量、肥育牛部門は肥育牛販売頭数、養豚部門は肉豚販売頭数、採卵養鶏部門は鶏卵生産量、ブロイラー養鶏部門はブロイラー販売羽数である。

( 10 ) 農業粗収益

農産物の販売収入、家計に仕向けられた農産物の価額、動植物の成（生）長・新植・生産による増価（加）額など、当年1か年の農業経営の結果から得られた総収益額を、農業経営全体及び当該部門について表示した。この場合、農畜産物の販売に伴う各種奨励補助金を含めることとしたが、稲作経営安定対策に係る受取金については、その受取時期が次年となるため、当年の結果

には前年産に係る金額を含めた。なお、とも補償及び水田営農確立助成に係る受取金は含まれていない。さらに、過年次の生産物で当年の年始めに未処分農産物として存在したものはこれを差し引き、当年の農産物で年末に存在した未処分農産物はこれを加算して当年の農業粗収益とした。

また、農業経営全体の農業粗収益の内訳を、作物収入、畜産収入及び農作業受託収入に大別して表示し、更にそれらの内訳を作目・畜種別に表示した。このうち、永年性植物（果樹等）の成長等による増減価額はその他の作物収入に含めており、当該作目の収入には含めていない。また、牛の販売収入については、牛を飼養している農家の主な飼養目的により「酪農」、「肥育牛」及び「その他」にあらかじめ区分し、その飼養目的により次表のとおり区分して計上した。

#### 牛の飼養目的と販売収入区分

牛の種類		牛の飼養目的		
		酪農	肥育牛	その他
乳牛		乳牛収入	肥育牛収入	その他の畜産物収入
肥育牛	乳用種	乳牛収入	肥育牛収入	その他の畜産物収入
	肉用種	その他の畜産物収入	肥育牛収入	その他の畜産物収入
育成牛	乳用種	乳牛収入	肥育牛収入	その他の畜産物収入
	肉用種	その他の畜産物収入	肥育牛収入	その他の畜産物収入

注：用役源体として減価償却中、又は減価償却済の牛の販売収入は、固定資産の売却収入となるため農業粗収益には計上しないが、帳簿価額との差額を減価償却額に加算、又は減算した。

農業現金収入は、生産年のいかに問わず、農畜産物等を農家が年内に販売することによって得た現金収入の総額であって、この中には当年以前において生産された農産物の販売収入も含んでいる。

当該部門の農業粗収益については、当該部門で生産され経営内部の他部門に仕向けられた中間生産物、副産物の価額は含めていない。

#### (11) 農業経営費

当年の流動的経費及び当年に負担すべき固定資産の減価償却費など農業経営に要した一切の経費を科目別に、農業経営全体及び当該部門について表示した。

この場合、自作地の地代、自己資本利子、家族労働見積額等自己所有の生産要素に係る実支払を伴わないものについては含めていない。また、自家生産物であって、種苗、飼料、肥料等として再び自家の農業経営において消費される中間生産物及び家計廃残物は算入していない。さらに、過年次に購入し年始めに存在する農業生産資材はその在庫価額を加算し、年末に存在する農業生産資材はその在庫価額を差し引いて当年の農業経営費とした。

農業現金支出は、農家が年内に支払った農業経営のための現金支出であって、これは、必ずしもすべて当年の経営費を構成するものではなく、当年以降に消費する目的で購入した経営用資材に対する現金支払額を含んでいる。

農業負担減価償却費は、建物、大農具・自動車、植物及び動物の償却資産である資本財につき、

当年に負担すべき減価償却費を表示した。この場合、農業と農業以外に兼用される建物、大農具・自動車については、その使用割合によって配賦した。

当該部門の農業経営費については、経営内部の他部門から仕向けた中間生産物、副産物の価額は含めていない。

#### (12) 借入金・買掛未払金（農業負担分残高）

農家の世帯としての借入金及び買掛未払金のうち、農業経営のために借り入れた借入金及び農業経営に係わる取引において発生した買掛未払金の年始及び年末の合計残高を、農業経営全体及び当該部門について表示した。

#### (13) 部門単位当たり指標

当該部門の経営収支等に関して、同一部門間で単純比較が可能となるよう当該部門の自営農業労働時間、農業固定資本額、生産量、農業粗収益、農業経営費、農業所得、農業純生産及び借入金・買掛未払金について、各部門の作付・飼養規模単位当たりで表示した。

この指標により、例えば、酪農部門の10～20頭未満階層と80頭以上階層というように規模が大きく異なる階層間の比較をする場合、実額でストレートに比較するのは困難であるが、搾乳牛1頭当たりでみることにより両方の収益性の相違等を把握することができる。

この場合の作付・飼養規模の単位については、酪農部門は搾乳牛1頭当たり、肥育牛部門は肥育牛販売頭数1頭当たり、養豚部門は肉豚販売頭数100頭当たり、採卵養鶏部門は採卵鶏飼養羽数100羽当たり、ブロイラー養鶏部門はブロイラー販売羽数1万羽当たりである。

#### (14) 当該部門比率

農業経営全体における当該部門の位置付けをみるために、自営農業労働時間、農業固定資本額、農業粗収益、農業経営費、農業所得及び農業純生産について、農業経営全体に対する当該部門の割合を表示した。

この指標により、例えば、得られる所得の割合に対して労働時間、固定資本額等の割合はどのようになっているか、所得は多いのに労働時間や固定資本額は少なく済んでいる等、経営内部における当該部門の位置づけをより明確に把握することができる。



## 4 利用上の注意

### (1) 実績精度

当該部門が1位経営の1戸当たり全国平均値における主要な項目の標準誤差率は、以下のとおりである。(標準誤差率(%)) = 標準誤差 ÷ 推定値 × 100)

経営全体の主要項目の標準誤差率

単位：%

	農業 粗収益	農業 経営費	農業 所得	自営農業 労働時間	固定 資本額	借入金 残高
稲 作 部門が1位	1.4	1.5	2.6	2.5	2.6	6.2
麦 類 "	6.0	5.5	9.6	7.3	8.1	15.4
露地野菜 "	2.7	2.7	3.4	2.3	4.6	12.7
施設野菜 "	2.8	2.9	4.2	2.1	4.8	10.1
果 樹 "	2.6	2.8	4.2	2.2	2.9	14.2
花 き "	4.7	5.7	6.1	3.7	8.0	16.0
工芸農作物 "	3.3	3.6	4.4	3.8	5.4	11.6
酪 農 "	1.1	1.2	2.1	1.2	1.7	5.0
肥 育 牛 "	5.0	4.7	11.3	11.3	4.4	11.7
養 豚 "	2.4	2.2	10.2	3.5	4.3	13.9
採卵養鶏 "	11.1	12.0	32.3	10.8	12.9	26.8
ブロイ-養鶏 "	7.3	8.1	21.4	7.0	15.3	27.3

1位部門の主要項目の標準誤差率

単位：%

	農業 粗収益	農業 経営費	農業 所得	自営農業 労働時間	固定 資本額	借入金 残高
稲 作 部門が1位	0.9	1.0	2.2	1.5	2.6	6.4
麦 類 "	4.1	4.7	8.7	8.6	8.1	21.8
露地野菜 "	2.2	2.4	3.3	2.3	4.6	12.5
施設野菜 "	3.3	3.4	4.6	2.4	4.8	11.3
果 樹 "	2.7	3.0	4.5	2.2	2.9	14.7
花 き "	5.3	6.4	6.6	4.3	8.0	16.5
工芸農作物 "	3.6	4.0	4.7	4.1	5.4	14.3
酪 農 "	1.1	1.2	2.3	1.2	1.7	5.0
肥 育 牛 "	5.3	5.4	9.9	15.4	4.4	12.1
養 豚 "	2.5	2.3	14.5	3.9	4.3	14.2
採卵養鶏 "	9.5	12.3	44.9	10.8	12.9	27.6
ブロイ-養鶏 "	7.1	8.0	25.5	7.2	15.3	26.6

(2) 統計表中に使用した記号

統計表中に使用した記号は、次のとおりである。

「 - 」は、事実のないもの

「 0 」は、単位に満たないもの

「 ... 」は、事実不詳又は調査を欠くもの

「 」は、負数又は減少したもの

(3) 本書についての連絡先

農林水産省 大臣官房 統計部 経営・構造統計課 分析班

電話：(代表)(03)3502-8111 内線2731、2732

(直通)(03)3591-9779

## 5 農業経営統計調査報告書一覧

(1) 農業経営統計調査報告 農業経営部門別統計(総合編)

(2) " " (第1分冊、稲作・麦類・豆類  
・いも類・工芸農作物部門編)

(3) " " (第2分冊、野菜・果樹・花き部門編)

(4) " " (第3分冊、畜産部門編)

(5) " 野菜・果樹品目別統計

(6) " 農業経営動向統計

(7) " 米及び麦類の生産費

(8) " 工芸農作物等の生産費

(9) " 畜産物生産費